

石島紀之著

『中国民衆にとっての日中戦争』

——飢え、社会改革、ナショナリズム——
(研文選書 120)研文出版 二〇一四・七刊
四六 二七二頁 二七〇〇円

本書は、戦時という非日常的な状況下での中国の民衆の生活とその心性を解明する目的から、日本軍の攻撃、食料問題、動員のための社会改革に民衆がどのように向き合っていたかを検討することによって、日中戦争とは中国の民衆にとって何であったのかの究明を試みたものである。日中戦争時期の民衆の実相と心性に迫る方法として、家族・宗族・秘密結社等の社会集団、エスニシティー、民俗、宗教、民衆文化、儀礼、人口移動等の多様な視角からのアプローチがあるが、本書では食料、民衆動員及びそれに伴う社会改革の問題をナショナリズムや民衆の心性と関連させて、二部構成で検討している。

第一部「飢えとの戦い」では、日中戦争時期の中国における民衆の食料を巡る状況がいかなるものであり、それが抗日ナショナリズムを含む彼らの心性にどのような影響を与えたかという問題を検討する。各章で、戦場に隣接した地域(浙江・河南)、日本・汪精衛政権支配地域(上海)、国民政府統治区(重慶・成都)、共産党根

拠地(晋察冀辺区・晋冀魯豫辺区)を取り上げ、国民政府、共産党、日本・汪精衛政権が民衆への食料供給に関する問題にどのように対処したかを具体的に分析する。戦時下では民衆にとって戦火から生命を守ることが最重要課題であり、衣食住の確保やその不足が彼らの心性に大きな影響を与えた。特に食料が最も重要であり、彼らの戦争に対する態度もこれによって左右されるため、政治指導者にとって彼らへの食料の安定的供給が社会の安定と抗戦の維持のために決定的な意味を持った。食料を巡る問題こそが、戦時下の民衆が置かれた状況とその心性の理解及び統治者と被統治者の関係を解明する上で重要な意味を持っていたことを明らかにした。

第二部「ナショナリズムと社会改革」では、抗日根拠地において民衆は日本軍の苛烈な侵略に対してどのように感じ行動したのか、共産党が実施した動員と社会改革にいかに向き合ったか、彼らにとって両者の相互関係はどのようなものであったのかを検討する。各章で、日本軍による掃蕩・治安作戦が最も過酷であり、共産党が動員のための社会改革を強力に推進し、民衆の心性、日本軍及び共産党・八路軍に対する反応や共産党の民衆動員と社会改革を検討する上で恰好な場であった太行抗日根拠地を取り上げ、ナショナリズムと社会改革に関連する彼らの心性と行動を多角的な視点から具体的に検証する。ここでは、共産党の県級以上の幹部が記した文献を編集した資料を丹念に読み込み、共産党の階級感や抗日論・革命論から見た現地の民衆の姿を詳細に描き出している。

本書では、「八年もの過酷な戦争下にあった中国の民衆は必ずしも『一致団結』といえる状態にあつたわけではなく、実際の状況はきわめて複雑であつた」様子を明らかにし、更に日本軍の侵攻、食料問題、民衆動員や共産党の社会改革等に対する反応が決して一様ではなかつたという彼らの複雑な心性を具体的に解明した。そして、日中戦争時期の政治権力と社会の関係を民衆の心性から生き生きと描きだしている点が本書の魅力を一層引き立てている。

(矢久保典良)